

## 渥美半島方言助詞の研究 (II)

江 端 義 夫

(2003年9月30日受理)

A Study of Grammatical Particle on the Dialects in Atsumi Peninsula in Japan (the second report)

Yoshio Ebata

This paper has described the various grammatical particles on the dialectal sentences in Atsumi Peninsula of Aichi prefecture in Japan. These particles are classified in five kinds. They are Kaku, Kakari, Fuku, Setsuzoku and Bunmatsu particles.

This descriptive paper has included these Kakari, Fuku, and Setsuzoku particles. This second report will succeed to the writing system of the first report of the paper. One of the aims of this descriptive paper is to show the communicative human life of the local individuals. These grammatical particles which indicate the dialectal features have had the special characters of the dialects.

We will be able to provide a systematic descriptive model on the whole dialectal particles of a certain society in Japan. This may be said to become one of the typical example of them.

Key words: Atsumi peninsula, Dialectal particle, Descriptive study

キーワード：渥美半島，方言助詞，記述的研究

### 第三部 係り結び叙法

方言では文語文法での慣用法や語形式が盛んに行われていたり、文語文法からの転成による表現が行われていたりする。

ここで問題にする係り結びは、文語文法でのことと考えられがちである。現代口語文法では、係り結びの法則が問題にならないし、特定の係助詞をとりたてて、係り結びを論じることは少ない。たしかに、当該地方の方言においても、文語文法での厳密な係り結びの法則は見られない。係り結びの法則が認められないのであれば、そのような部立てを設けることに意味がないかと言えば、そうではない。全国の方言を眺望する立場から見ると、各地に係り結びの法則の残存があり、これらを正当に位置づける必要がある。方言は文語と口語とを結ぶ生きた現実だから、揺れ動く実体を大事にする言語人間学として、変容しつつある係り結びの実体をとらえることの意義は大きい。

以上の立場により、係助詞の中から「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」を取り出して、係り結びを論じる。

ただし、実地調査が不十分であったために、必要な資料が得られていない虞れがある。したがって、以下では、項目は立てつつも、文例がなくて、簡単な説明ですます箇所がある。

#### 第一章 係り助詞「ソ」の用法

当該地方では、「ソ」がきわめて劣勢である。

△どうぞ、お願いします。

のような表現においても、「ぞ」を使わずに、

△どうか、お願いします。

になる。その他にも「何ぞ」でなくて「何か」、「いづれぞ」でなくて「いづれか」となる。「ぞ」は避けられがちである。したがって、

△これぞ、本場の味！

などという共通語の言い方は当該地方では稀である。

その代わりに、

△これこそ、本場の味！

△これは、本場の味！

などと言うであろう。尾張地方には、係り助詞の「ぞ」が現在でも盛んであるが、渥美半島地方では、「ぞ」

がきわめて稀である。ほとんど使用されていない。

他方、係り助詞の「ぞ」が終助詞に転成して「ゾン」や「ゾネ」になっている。これらは渥美半島地方で、よく行われている。

## 第二章 係り助詞「ナン」の用法

文語文法では、先の「ゾ」と同様に、この「ナン」も文末や句末で用言の連体形を取ることになっている。そのような係り承けの関係を仕立てる制約がまさに係り結びの法則たるところである。しかし、制約どころか、「ナン」という係り助詞自身が聞かれない。当該地方には、係り助詞の「ナン」が無い。

しかし、終助詞（文末詞）の「ナン」はある程度行われている。むしろ、尾張の方が、この「ナン」文末詞（終助詞）は栄えているであろう。尾張地方では、

△今日は暑い日だナン。

のように「ナン」が行われている。

渥美半島地方では、終助詞（文末詞）の「ナン」よりは、「ノン」や「ノンホイ」の方が盛んである。“豊橋のノンホイ言葉”と称される程に「ノン」は顕著である。

要するに、当該地方では、係り助詞「ナン」から始まり終助詞へと転成していく一連の言い方が、受け入れられなかったのであろうという推定がなされ得る。

## 第三章 係り助詞「ヤ」の用法

「あれやこれや」とか「夏草や〜」とか、体言（名詞）を承けて「や」が来る。このような切字の「や」が、文語文法では、用言の連体形で結んでいたと言われる。現代日本の共通語でも、「や」は述部に特定の活用形を結ばない。「や」の拘束力は無くなっている。

○タンボヤ ナンカデモ エライ カン。田や何か

でも、疲れるかね。中女→中女、赤羽根

上の文例の「タンボヤ」の「ヤ」は並列の意味がある。ものを列挙していく言い方に作用する「ヤ」である。この「ヤ」は、文末に連体形を取らない。「ヤ」の力は前提条件句の中だけに留まる。

ところで、接続助詞化した「ヤ」も述部への拘束力は無い。

△本が出版されるや否や売り切れた。

これらの「や」が文末の終助詞に転成し、一つの安定した情念を添える。その例、

△そろそろ行くや。

以上のように、共通語の「や」には 三種類がある。これらと同様に、当該地方にも三種類があるはずである。しかし、これらには符合する適切な方言資料が得られていない。

## 第四章 係り助詞「カ」の用法

「カ」には疑問の意味がある。不確かさを表す意味もある。「カ」は文中のどこに在っても、疑問の意味と無縁ではない。

次の3文例では「何」「誰」「幾人」を承けて「カ」が来ている。

○ナニカカカ シトーツワ シンボーセニャ イカン。何かしら、一つは辛抱しなければいけない。

老女→青男、小中山

○ダレカ フン オーキナ コージョーオ タテヤ フン。誰か大きな工場を（当地に）建てればね（働く場があるのにね）。老女→青男、福江

○イクタリカ アリヤ エーケド…。幾人かあれば良いけれど…。老女→青男、福江

不特定なものごとを話題にして、疑問詞で表現するとき、「カ」は述部への持ちかけの橋渡し役を果たすことになる。このような機能から見て、構文上の前提条件句を構成する場合が多い。文語文法では「何かあらむ」のように、直ぐに連体形述語文が承接することがある。しかし、上の三文例で確認できたように、「カ」が関わって条件句を構成した方が自然な文になる。むしろ、「カ」は述語文よりも、条件文と関わる方を選択するようになった。

ところで、次の2つの文例は、数詞を承けて「カ」が続くものである。

○ジュツコカ ソコラ フェタ カイノー。（戸数は）十戸かその辺り、増えたかねえ。老男→青男、波瀬

○バスデ ヨッカカ イツカ カカル ネ。バスで（行けば）4日か5日かかるね。老男→青男、田原

上の2例では、「カ」が、英語の「or」に相当する意味で、「ないしは」「あるいは」「または」ぐらいの語用論的機能を果たしている。

## 第五章 係り助詞「コソ」の用法

共通語では、あいさつ文に「ようコソいらっしやいました」がある。あるいは、「これコソ自慢の酒」のように強調した言い方で普通に聞かれるのが、「コソ」である。

しかし、当該地方の日常生活では、「コソ」があまり聞かれない。筆者の印象では、西日本では「コソ」は親しまれないが、東日本では好まれている語だと考えている。したがって、渥美半島が、ちょうど東西方言の境界とは言えども、文法面では西日本の特色を持つので、「コソ」にあまり馴染まないのだらうと推定している。

ところで、当該地方では、係り助詞「コソ」が終助詞(文末詞)化した例が見られない。たいていの係り助詞が転成して終助詞になっていくのに、「コソ」終助詞には全くそれが無い。どうしてだろうか。その理由を想像する手がかりがない。

言うまでもなく、当該方言には「コソ」を承けて述部を已然形で結ぶ表現様式はない。

以上、当該地方の方言では、係り結び叙法に関わる「ゾ」「ナン」「ヤ」「カ」「コソ」のうち、「カ」と「ヤ」だけが少しく行われているものの、「ゾ」「ナン」「コソ」はほとんど聞かれない。また、係り結びの呼応関係は存在しない。その他に「な…そ」という禁止用法もない。山梨県地方では、文末詞の「ソ」が現存し、文語文法での「そ」が残存する。しかし、渥美半島地方では、「ソ」が見られない。又、係り結び叙法に関わる「な」係助詞も存在しない。

このような係り結び叙法の消失(または無存在)は、何を意味しているのだろうか。前件と後件との緊密な約束が崩壊するというのは、ちょうど、陳述副詞の呼応が乱れるのと軌を一にしているかもしれない。文中の語句が綿密な力関係をもって体系的に組織化されていたのとは違って、このごろは、文中の語句相互の関係が粗野で孤立的に振る舞えるようになったのではないかと考えている。文法が語彙的になったのであろうか。

## 第四部 副助詞叙法

### 第一章 制限機能を担う副助詞叙法

#### 第一節 副助詞「ギシ」

副助詞の「ギシ」は、当該地方の老若男女を問わず、普通の単語として、使用されている。これが外の地域の人には通じにくい俚言だということを知っている土地人は、少ないのではなからうか。少なくとも当該地方の土地人には、これが方言であることが意識されていない。用例は、次のとおりである。

- ミョージギシ オシエテー。せめて名字だけでも教えて! 女子中学生→青男, 田原
- ズイブン アル ソン。ヒトリギシ…。ずいぶんあるね。一人だけ…。老男→老男, 中山
- イロワ クロギシ。色は黒(色)だけ。中男→青男, 堀切
- フタリギシデ イク。二人だけで行く。老男→青男, 豊橋市植田町

以上の4文例で見られる副助詞の「ギシ」に「限定」の機能を指摘することもできる。体言を承けて述部の動詞又は用言に持ちかけ、一定の制限を加えている。たとえば、最初の文例では、「せめて名字だけでも教

えて!」という共通語訳が可能である。「名字ギシ」と表現されて、「せめて～だけでも」の意味を呼んでいる。「ギシ」が「だけ」に置き換わっただけではない。譲歩的な条件文の含みさえ作り出している。文を前件と後件とに分けるとすれば、その前件を複雑な条件節に仕立てる機能を十分に持たせている。

さて、この「ギシ」は「キシ」と無声子音化しても使用される。「ギシ」の方が「キシ」よりも使用回数が多い。「ギシ」の出自は不明である。共通語の「キリ」が当該地方で音の転化を生じ、kiri>kisi>gisiとなったかと考えられたりもしている。これらの三つの語形は聞かれなくはない。しかし、確実な用例を、短期間の調査中に収集しえていない。

#### 第二節 副助詞「ダケ」

「限定」の意味を体言に付与して述部に関係付けを行うのが、副助詞「ダケ」の主要な機能である。外に“ほかしの効果”がある。

○カイシャダケワ サンジューネン オル。会社だけは、30年いる。中男→中男, 田原  
勤務先の会社に、もう30年も通い続けたことを、さりげなく語る。上例の「ダケ」は周知のとおり、「丈」という名詞で、「丈が高い」「背丈を計る」などの言い方で知られる。

「ダケ」は当該地方で最も自然に使用される「限定」用法の副助詞である。なぜならば、古い「のみ」は、もはや使用されないからである。「のみ」でなくて「ダケ」が使用されるようになっている。

さて、「ダケ」が疑問詞の「ドレ」と複合して用いられる例も少なくない。

- ドレダケ クルカテ ユー コトダモンダイ  
フー。どれだけ(人が)来るかということだからねえ。老男→青男, 赤羽根
- クモガ ドンダケ クルヤラ シットツタニ…。  
雲がどれだけ来るか知っていたのだが…。老男→青男, 小中山

上の2例のように、疑問詞に「ダケ」が付けば、「ダケ」が直前の語を限定するという機能ではなくなる。「どれほど」とか「どれくらい」とかの“ほかし効果”を担うことになる。

以上、「ダケ」が主に「限定」の意味を担う文例と、それ以外に「ほかし」の意味をも担うこととの二つを記述した。

#### 第三節 副助詞「バカ」「バッカ」

「バカ」「バッカ」は「計る」「図る」などの計量的なことや、ものの見はからいを広く言い表すことに関

わる。どうして、それが限定や制限の機能に収斂していったのか。

「バカ」「バッカ」は体言の唯一さを強調したり、制限するばかりでなく、「ほぼそのくらい」の意味も担う。

- ヒトバカ サガサンデ ジブンモ サガサニヤ  
イカン。他人の欠点ばかりを探さなくて、自分の  
をも探さなくてはいけない。老女→青男, 小中山  
○タント…, ヨニンバカ ハイッテ…。たくさん…,  
4人ほど入って…。中女→青男, 小中山  
○ワジ イキヤー オンシツバッカダ ワ。ミテ  
オイデ ナ。和地集落へ行けば, 温室ばかりだよ。  
見て行きなさいよ。老女→青男, 福江

上の文例での「バカ」「バッカ」が文脈上で担う意味は, only の意味や, about の意味や, all over の意味にわたって広く見られる。しかし, 基本的には制限や限定の働きであることに変わりがない。

以上, 「ギシ」「ダケ」「バカ (バッカ)」を第一章で扱い, これらが主たる機能として担う「制限 (限定)」の意味を記述した。

## 第二章 「頃合」機能を担う副助詞叙法

ちょうど手頃であるとか, ほど良いぐあいだとかの適切さを表す副助詞に「ホド」「グライ」「アタリ」「アツラ」がある。これらは, 第一章の「制限機能を担う副助詞」と全く異なり, 束縛を放ち, 頃合いを意図する点に特色がある。

### 第一節 副助詞「ホド」

「ホド」の特色は, きめつけたり限定したり制限を加えたりすることから離れ, なるべくゆるやかなあり方を求める態度の表明である。程度のより勝っていることや頃合いであることを言い表す。

- サホド クニヤー ナラセン。あまり気にはならない。老女→青男, 小中山  
○ツトメニンノガ ヨッポド エーゾ。勤め人 (給与所得者) の方が余程 (ずっと) 良いよ。  
老男→青男, 波瀬  
○コチラエ クヤー ヨッポド エー。こちらへ来れば, ずっと (はるかに) 良い。老男→青男, 小中山

「ホド」が体言の「程 (ほど)」に由来する点で, 複数間の比較の上に立って, 何かが他者よりもどうであるとの価値判断が述べられる。また, 「～なほど～」と述語文が承接するとき, 話し手の主観的な心情が表明される語句が見られる。

### 第二節 副助詞「グライ」「グレー」

一位, 二位, 三位と助数詞によって, ものの序列や順位を表す。この「クライ (位)」が副詞として使用される。体言が転成して副助詞になるとき, 「序列」だけを言い表すのではなくて, 数量を含むように拡大された。したがって, 副助詞の「くらい (位)」は, 数も量も覆って「ほぼそのあたり」を意味する。次の文例のとおりである。「くらい」は連母音が相互同化をするので, 「グライ」と「グレー」とが有りうる。

- ヨンジッキログライ アラー ノー。40kg ぐらいあるよねえ。老男→青男, 堀切  
○ヒチジューグライニ ナラー ネ。70歳ぐらいになるよね。中女→青男, 堀切  
○ヒヤクマンガレー ツイトル モン。百万ぐらいは付いているさ。老男→青男, 豊橋市伊古部町  
○イチネングレー ヘータ ナー。一年ぐらい入院したさ。老男→青男, 豊橋市伊古部町

以上の4例は, みな, 量を表す数詞を承けて「ぐらい (位)」と表現している。先にも述べたが, 「ほぼ, そのあたり」を意味する質量表現に関わっている。したがって, 述語文は, 客観的な叙述に関わる動詞になりやすい。「ある」「なる」「つく」「入る」などの動詞が述語文に見られる。これらは, 主観性の乏しい表現をかもし出している。

「ほぼ, そのあたり」との判断譲歩を表しながらも, 述語文の動詞に主観性が薄い動詞を招来させている。

### 第三節 副助詞「アタリ」

副助詞の「アタリ」は体言の「辺り」に由来するものと考えられる。共通語にも「アタリ構わず泣きわめく」「駅のアタリを探す」「来年アタリはどうかね」「山田太郎アタリが適任だ」などと使用され, 意味に一定の輪郭が見える。つまり, 中核でなくて, その周辺というのが本義であろう。すなわち, 明瞭に指定するのではなく, 漠然とおぼめかす意図を言い表すものと考えられるのである。

さて, 当該地方の方言例でも, 共通語の場合と同じ意味あいで使用されている。

- コトシャアタリジャ アンタ, マダ…。今年あたりではあなた, まだ…。老男→青男, 豊橋市伊古部町

この「アタリ」を体言または名詞と見て, まだ, 副助詞には入れない考え方も少なくない。しかし, 体言の後に位置して, “ほかし効果”を担う一定の機能に注目すれば, この「アタリ」を独立した副助詞の一つと見なすことは許されるのではなからうか。

#### 第四節 副助詞「アツラ」

副助詞「アツラ」の由来は、不明である。当該地方では、副助詞の「アタリ（辺り）」と同じような意味で「アツラ」が使用される。そんな理由で「アタリ」>「アツラ」ではないかと考えてみたが、*atari* > *atsura* に音韻変化の必然性は見出しにくい。

「アツラ」は土地人にとって馴染みの表現である。しかし、この言い方が方言であるという意識はもたれていない。「アタリ」と「アツラ」との両方を使っても、双方ともに「共通語」だと意識しているようである。文例は次の通りである。

○キョネンアツラ ハイヤーノ オトバツカデ…。  
去年辺りは、タクシーの音ばかりで（うるさくてね）…。老女→青男，田原

○キョネンアツラ ワルカッタ。去年あたりは（体の具合が）悪かった。老女→青男，田原

以上の二文例での「アツラ」は述語文への制約が希薄であり、実質叙述文でも判断叙述文でもかまわない。直前の体言との密接度が高く、述語文への統括力が及ばないのである。

以上、第二章では、「頃合」機能を担う四種類の副助詞を取り上げて、論述した。中庸を求める方言生活者の心境をうまく表現して、親しみのある副助詞ばかりである。

#### 第三章「均等配合」機能を担う副助詞叙法

当該地方の方言で「均等配合」の意味を表す副助詞には、共通語と同じ語形も含めて複数考えられる。しかし、今回の方言調査では「ずつ」しか得られなかった。

たとえば共通語では、「一軒あて（充て）千円徴収する」とか「三人ずつ（宛）のグループを組む」などのように、「あて」「ずつ」などの副助詞が考えられよう。これらは日常生活の中で、なくてはならない語になっている。

ところで、当該方言では、「つ」「ずつ」を取り上げ説明する。

##### 第一節 副助詞「ツ」「ズツ」

「つ」は「一つ、二つ、三つ」と数をかぞえるときに使われ、数詞に承接する接尾語の「個、箇」である。共通語では、「一つ」から「九つ」までで、「十つ」とは言わない。「二十つ」とも「五十つ」とも言えない。きわめて限られた用法しか見られない。

しかし、当該地方の「ツ」は、以下で示すように、共通語よりも柔軟で自由な承接の幅をもつ。

○ゴジューツ メゴメオ セズニ ブローカー ム

ラデ トツテ クレル。(メロンを) 50ずつ目方を計らずに、仲買人が一括して引き取ってくれる。  
老男→青男，赤羽根

数量の50というのを承けて、「ツ」が承接している。この「ツ」は共通語には見られない用法である。共通語では先にも述べたように、「一」から「九」までにしか付かない。

次の文例では、副詞の「チート」に「ツ」が承接する。共通語には見られない用法である。

○チートツワ トル コトガ ハゲシク ナツタテ  
コトダ フー。少しずつは、取ることが激しくな  
たということだね。老男→青男，豊橋市伊古部町

当該地方では、このように「ツ」に執着し「ずつ」に馴染まない気風がある。用例は探していないが、「ツ」を「ンツ」や「ツンツ」に取り換えて、「いっこんツ（一個ずつ）」とか「ひとつんツ（一つずつ）」とかの言い方をすることがある。ただし、共通語と同じように、「ずつ」も当然ある。この「ずつ」は同一数量の均等配分を表す。

○デンシヨギク、グツツリ ニハイツツ ハコブ。  
電照菊を、ぎっしり詰めて、竹籠二杯ずつ運ぶ。  
老男→青男，赤羽根

上の文例で「ズツ」は共通語での「ずつ」と用法が同じである。こんな場合に、「ズツ」の代わりに「ツ」を用いることがあっても不自然ではない。少しずつ、「ツ」が「ズツ」に変わってきている。しかし、まだ「ツ」も「ツンツ」も健在であり、「ズツ」に取って替わったというわけではない。たしかに「ツンツ」は目立たないので、あまり聞かれなくても、方言と意識されていない「ツ」は「ズツ」と共用されているのである。

## 第五部 接続助詞叙法

### はじめに

接続助詞は、原則として、文中において、前接部分と後接部分とを繋ぎ合わせる機能をもつものとされる。ただし、後接部分が省略されることが多くて、とかく前接部分に承接する接続助詞が来て、それで文が完結する特別な用法も少なくない。たとえば電話で受話器をとり上げ、「はい、山田太郎ですけど。」と言って「何のご用件でしょうか？」と問うことはしない場合がその例である。接続助詞の「けど」は、終助詞になっている。または文末詞化しているのである。こういう例も少なくないが、原則的には、接続助詞に前接する用言的述語句を承けて、それを後続の用言的述語句へ展開させる働きをもつ。

接続助詞叙法には、大きく分けて三種類が見出される。それらの体系は以下の表のとおりである。

#### 順接仮定条件接続叙法

##### (1)「ば」仮想叙法

- ①「ニャ」叙法
- ②「ヤ」「ヤー」叙法
- ③「ナ」叙法

##### (2)「タラ」仮想遂行叙法

##### (3)「ト」仮想開示叙法

#### 順接もちかけ接続叙法

##### (1)順接述語句形成「テ」叙法

##### (2)意志に続いて情動を承接させる「ト」叙法

##### (3)原因・理由に続いて判断を承接させる「デ」叙法

##### (4)原因・理由の言い訳による終止指標を示して、相手に発言権を譲る叙法

- ①「モンデ」「モンダイ」叙法

#### 逆接続叙法

##### (1)「ガ」対立叙法

##### (2)仮定・譲歩「テモ」叙法

##### (3)謙虚の「ケド」「ケドモ」「ケドガ」叙法

以上の表では、大局的に順接と逆接とで成り立っていることが分かる。ものの理が遂行的であるか逆行的であるかによって、文中での述べ方に二通りが見られることによる。

以下では、具体例に即して接続助詞叙法を解説する。

## 第一章 順接仮定条件接続叙法

### 第一節 「ば」仮想叙法

当該地方の方言では、接続助詞の「ば」は文中に顕在化しない。たとえば、「君が行けば、僕も行く」のように、「ば」を明瞭に表すことがない。たいていは、直前の語句と縮合して原形を留めないのが常である。

以下では「ニャ」「ヤ（ヤー）」「ナ」の三種類が、「ば」仮想叙法を形成する。方言社会においては、共通語や書きことばで共通の「ば」接続助詞を使用することが、却ってわざとらしさを表すものとして敬遠されるという事実注目すべきである。

#### (1)「ニャ」叙法

「ば」が承接するのは、直前の用言が仮定形の場合である。たとえば次のとおりである。

○カシコマラニャ イカン。正座しなければいけない。老男→青男，田原

この例では、動詞「カシコマル」の仮定形、「カシコマラネ」に「バ」が形態素として付いている。/neba />/nya /の音韻変化により、「にゃ」ができた。

○ムカエガ コニャ シカタ ナイ。(天国からの使者の)迎えが来なくては、(生き長らえるより他に)仕方がない。老女→老女

上例は、文脈としては世間でよく聞く慣用表現である。しかし、民間の運命知をうまく表現していると感じることがある。

○キオ ツケニャー…。気をつけなくては…。老男→青男，田原

これは、命令する意図で、それを仮定条件接続叙法に仕立て、しかも最後まで述語文を言い切るの失礼とみなし、途中で言いきしたものである。このように微妙な意図をふまえて、もの言いはなされる。

#### (2)「ヤ（ヤー）」叙法

潜在する「ば」接続助詞が顕在形として「ヤ（ヤー）」を示す場合が、この叙法である。「ば」接続助詞が直前の用言の仮定形と縮合して音変化を起こし、拗音の[-ja:]になる。この大きな変化は、意外と容易に生じている。次の具体例を見よう。

○ゴソゴソ シトヤー ジツキニ ジカンガ キチャウ。ごそごそ(家事を)していれば、すぐに時間が過ぎてしまう。中女→中女，赤羽根

上の文例で「シトヤー」は「していれば」/siteireba /である。実際はしておれば/siteoreba /である。これが/sitorjaa /を経て、/sitojaa /になった。拗音/j /の挿入により、「ば」/ba /は安定状態に至る。ちょうど「これは」が「こりゃー/korjaa /になり、拗音/j /が介在するのと似ている。また、意味の上でも、「は」が係助詞として述部に一定の制約を与えたり、修飾したりするのと同様に、「ば」は文中にあって、述部に対して一定の仮定的条件の意味を付与する点で類似している。

さて、他の文例は次のとおりである。

○ヤヤ エーダケドモ。やれば良いのだけれども。

老女→青男，福江

「ヤヤ」は「やれば」が原形である。[jareba]のラ行音[re]が脱落し、さらに拗音が入っている。文脈上でなら意味が分かるが、常に「ヤヤ」だけを取り出したら、意味は分かりにくい。

○ホツイ ミチオ トオツテ キャー イケルデエン。細い道を通って行けば、行けるからね。中男→青男，波瀬

人に道を教える場面での言い方である。「キャー」は「行けば」であり、語頭音の「イ」が脱落して使用されている。「イ」の響きが弱いので、しばしば省略されてしまう。

○アキオチ コエオ ヤヤー デキスギタリ ネー。

秋落ち、作物に肥料をやれば、できすぎたり (して) ねえ。中男→青男, 堀切

「ヤヤー」は「やれば」が原形である。「アキオチ (秋に稲穂が落下する現象)」とは、まさに現象そのものを言い表した言葉である。収穫の秋に、実が落ちるとは、皮肉で残酷な造語である。

さて、以上の文例で分かったように、「ヤ (ヤー)」は仮定形の「～れば」の縮合によるものであり、当該地方の特色を示す一表現形式と言える。

### (3) 「ナ」叙法

接続助詞「ば」が承ける語形で、「～ねば」「～なければ」に相当する場合に、「～ナ」という語形式が成立する。

○ソフ ヒニ カワカイト カナ イカンド テオ  
カケニャー イカンシ フー。その日に乾かしておかねばいけないから、手を掛けなければいけないしねえ。老男→青男, 赤羽根

上の例で、一文中に仮定形が二度出ているが、一方は「～ナ」で他方は「～ニャー」である。文中の用法で、「～ナ」と「～ニャー」とで、承接する動詞に好き嫌いがあるわけではない。すなわち、「～おかな」も「～おかニャー」もあり得る。また、「～かけニャー」も「～かけナ」もあり得るのである。双方の互換性と共用性がありつつも、一文中で「～ナ」と「～ニャー」とが併用されている事実に豊かな表現を楽しむ土地人の心の余裕を見出すことができる。しばしば、言語法則を狭く解釈しようと性急になって、同じ環境の語形は互いに衝突しあって一方が他方を消滅させる、と言いがちである。しかし、必ずしも同一環境での斉一化という言語法則は、この場合、あたらない。

先の文例で、接続助詞「ば」が潜在化するときを、「ナ」で表現していた。その際に、「～カナ イカン」と「～カケニャー イカン」とがあり、動詞句の「イカン」が後接している。文中の環境はほとんど同じである。いわば、気分を変えて言い表すために、複数の言い方が楽しんで使われたと見なされる。

以上の三種類が「ば」順接仮定条件叙法の具体例である。

### 第二節 「タラ」仮想遂行叙法

条件表現の中には、「～ば」の潜在形以外に「タラ」がある。たしかに、「～タラ」についても厳密に言えば、「～タラ (バ)」である。「バ」接続助詞の潜在は当然としなくてはならない。また、「タラ」は助動詞の「た」の活用語形と見ることもできるし、「た」+「なら」+「ば」が縮合して「タラ」に落ちついたと

見ることもできよう。いずれかに決めず、ただ語形をとらえて、「タラ」叙法とみなしている。

文例は、次のとおりである。

○ナニブン オチツイタラ タブム。何分、落ちついたら、頼む。老男→老男, 小中山

上の文で、「落ちつく時」が近いうちに予想され、その時には頼みますよ、と頼んでいる。丁寧に依頼したい時には、ずばりと用件を言わないで、このように含みのある言い回しを用いる。このような仮想叙法に仕立てた婉曲表現の方が直接的な依頼表現よりも好まれている。さしでがましきや単刀直入にもの言う人よりも相手の立場に気をつかい、都合の宜しい折りに依頼したいと控えめに言い表す方が、相手の行為を制限する割合が少なくなるので、思いやりの深さを示す言い方になり、より優れている。こなれた表現ということになれば、やはり、「タラ」仮想叙法になるというのは、うなづける。

次の文例も、文法遂行が不可能になったことを表現したものである。

○ミセート オモツタラ イッチャッター。見せようと思っていたら、行ってしまった。老男→老男, 中山

上の文例の述部「行っちゃった」という行為は話し手が「見せようと思った」時よりも以前である。自分の行為について、反省的に説明している。

### 第三節 「ト」仮想開示叙法

接続助詞の「ト」はBの叙述がどういう理由でそうなるかを、Aという表現で開示するものである。ちょうど、「2に3を足すと5です」のように、右と左との等価符号の役目をするものとも言える。次の文例を見よう。

○クセー ナルト ヤマランダ。癖になれば、とめられないのだ。老男→老女, 田原

「止められない」という(B)の結末は、(A)の「癖になるならば」という条件が付いている。このような開示を結果という関係で成り立たせている。

当該方言での「ト」は共通語での「ト」と全く同じである。従って、先の文例でも、「癖になる前に止めれば、文そのものが成立しない」という内容である。「ト」はそのように、「もしも～ならば～」の言い方における仮想部分を担っている。

以上の例は、「もしも～ならば」にあたり、仮定の意味が強いものであった。次章では、それらとは異なり、もちかけ性の接続叙法について考察する。

## 第二章 順接もちかけ接続叙法

## 第一節 順接述語句形成「テ」叙法

述語動詞が二つ、「テ」を介して続き、別の述語句を形成することがある。ものごとを微細に言い表す必要から、どんどん生み出されている。こういう場合の「テ」も接続助詞の一つと見なすことができる。ただし、これをアスペクト形成要素と言うこともできるが、品詞論では、やはり接続助詞であることにまちがいはなからう。すなわち、「テ」を介して種々のレベルの語句や節や句が形成されるが、学校文法では連文節のまとまりについて論じる場がない。したがって、接続助詞「テ」の多様な用法が見られても、的確に記述しうる枠組み体系を、なかなか設定できない。

たとえば、共通語で「君に買ってきてみて貰ってもいいのですが…」という言い方がある。四回も「て」が使われている。これらの「て」にはそれぞれ階層構造が見出せるし、それぞれに異なった文法構造上の役割がある。しかし、それをどのように仕分けたら、良いか、今の段階では名案が浮かばない。

方言についても、「て」接続助詞の用法に違いが見られる。しかし、厳密な意味用法の峻別は、別の機会にゆずる。ここでは、おおざっぱなものとする。

## (1) 「原因」+「テ」+「結果」

前件に原因や理由を表す動詞が来て、それを「テ」接続助詞が承け、次いで結果を表す動詞へと続けていく場合を分出してみた。

○コマツトル コトガ アリセーテ コマツタラ  
フン。困っていることがあり過ぎて困っていたら  
ね。老男→青男, 中山

上の文では、「あり過ぎる」のでそれが原因となって「困る」とある。そういう関係が出ている。その前後を「テ」でつないでいる。次の文例も、同じである。

○アゼー アチー アケテ コマル。畔に(ザリガ  
ニが) 穴をあけて困る。老男→青男, 豊橋市植田  
町

○ハラー ケラレテ ハラー イタイ。腹を蹴られ  
て、腹が痛い。老女→中女, 赤羽根

上の二文例でも、接続助詞「テ」の前には、文の前後にある述語用言の判断を導き出した原因が述べられている。つまり、原因から結果へという順接の関係が、順行的に述べられているとみてよい。

## (2) 「そして」にあたる継続を示す「テ」叙法

二つの動作が、順次に継続し展開していくことを表すものと説明できる言い方である。

文例は以下のとおりである。

○ヨオ スマカイテ クデ ナ。世を済ませて行く  
(死ぬ) からね。老女→中女, 小中山

○ニヅクリ シテ ダサニヤ ナラン。荷造りをし  
て(市場へ) 出荷しなくてはならない。老男→青  
男, 赤羽根

○オーチャクシトツテ ウマイ モノオ クワート  
オモ。横着していて、美味しいものを食おうと  
思う。老男→青男, 田原

以上の三例では、二つの動作が必然的な継続性をもって続く時、接続助詞の「テ」が有効に機能することを示していた。

## (3) 補助動詞構成要素としての「テ」叙法

共通語の補助動詞では、接続助詞の「テ」を介して二つの動詞が緊密に結合し、一体的な振る舞いをする。その際には、後続の動詞の本来の意味が消え、語頭の動詞が主役をつとめる。たとえば、「書いておく」の場合には「書く」が主役で、「おく(置く)」は本来の意味を消している。別の意味を加えている。その仲立ちをするのが「テ」である。

上の類似する「テ」の用法が豊富に見られる。しかし、必ずしも後続の動詞が静かに本来の意味を消すとは限らない。多様な演じ方を見せることによって、補助動詞の複雑な雰囲気づくりに貢献しているのである。以下に文例を掲げる。

○キートツテ ミマショー。聞いていてご覧なさい。

中女→老男, 中山

この例は、相手の行為を勧奨する言い方であり、敬語である。共通語の「to try to～」ではない。「～してご覧なさい」の意味である。

○モラツテ ミラマイ カ。貰ってみましょうか。

中女→中男, 赤羽根

上の例の「～テミル」は共通語と同じく「to try to～」である。「見る」がラ行五段化しているし、「マイ」が勧誘になっている。

○ニヒャクゴジュー ツクヤシテ クヨ。250個、

作らせてくれ。老男→老男, 小中山

「つくらせて」が「ツクヤシテ」とある。ラ行音が脱落し、さらに下二段の「させて」が下一段の「サシテ」に変じている。

○ツツンデ オクレマショー。包んで下さい。老女  
→青男, 小中山

「～テオクレ」は敬語である。さらに興味ぶかいのは、「マショー」という未来化法が見られる点である。普通なら「ませ」で済むところである。それを、命令形の乱暴なのを避けて、志向形に改め、「ましよう」に



したのが優れている。この丁寧さの工夫が特色をきわだたせている。

○オレン カシテ ヤライ。俺のものを貸してやろうよ。老女→青男, 小中山

これは男の言葉と映るであろうか。いや決してそうではない。「オレ」は男女共用の謙讓語として、当地方では健在である。

○コシャッテ モラウ。こしらえて貰う。中男→中男, 小中山

「やる」と「もらう」は、「テ」を介して隣接する動詞と一体化して使用される。

○トランデ シマウ。取らないままで終わる。中男→青男, 堀切

「～テシマウ」は「シマウ」が補助的であり、分解不可能である。

○オリテ オイデン ホイ。下りていらっしゃいよ。中女→中男, 豊橋市内

「ホイ」が文末に添加しているの、「オイデン」がアクセントの山を持つ。「ホイ」がなければ、「オイデン」にアクセントの山が来ず、「オリテ」に意味もアクセントも吸収される。

## 第二節 意志に続いて情動を承接させる「ト」叙法

自分の意志や希望を述べた後に「ト」が続き、次いで包括的に「思う」とか「感じる」とか「する」とかの情動を表す用語が来る。「叙情と説明」の一対がとらえられ、一見、引用語法に似ている。日本語の引用表現では、直接話法と間接話法との区別が明確でない。しかし、話し手が「ト」引用叙法を用いる際に、「私も行ってみたいと思う」のようになり、「と」を介して、二つの述語動詞が並置される。前に置かれる「行ってみたい」が意志や希望を表し、後に置かれる「思う」が心情や情動のメタ言語(説明)になっている。これと同じ様式の叙法形式が、当該地方の言語社会にも見出されるのである。以下には類似の文例をとりあげる。

○ソフ トキワ キサンジーケド オコッチャ イカント オモッタ。その時には気分が良いけれど、怒ってはいけなかった。老女→青男, 小中山

○ソソナ カワラント オモ一 ナ一。そんなに相違はないと思うねえ。中女→青男, 田原

○オーキー ヤツヤ一 エート オモ一ガ。大きい者や…良いと思うけれど。老男→青男, 波瀬

○ヨバラート スル。呼ぼうとする。老女→青男, 小中山

以上の4文例では、前後の文で、「ト」の後に情動から遠い意味の「スル」が来ていることが少し気にかかるであろう。しかし、この「スル」が心情の解説になっ

ていて、「～しようとする」の意味として機能しているとみられる。つまり、「よう」が内在するのである。そこで、本節に入れた。文脈上で、語用論的な含意が取り込まれたのである。

## 第三節 原因・理由に続いて判断を承接させる「デ」叙法

はじめに実例を見よう。

○イゴイトルデ イカン ワ一。動いているから駄目だよ。中男→中男, 堀切

上の文例で、「デ」接続助詞は動詞の終止形に承接している。「デ」が付くと、必ず「～だから、～なので」などの原因や理由を後続文にもちかけていく働きを担う。おそらく、共通語の「雨で衣服が濡れた」によって示されるように、格助詞の「で」が接続助詞化のいきさつをよく暗示していよう。「雨のせいで、雨のために、雨によって、雨にて」の訳が相当することで分かるように、「で」は、格助詞から接続助詞へ転化する可能性を十分に秘めている。したがって、体言に承接して原因・理由を示せば格助詞であるけれども、用言に承接して、同様の機能を果たせば接続助詞ということになる。

次の文例では、事実を述べ、それへの判断が続けられる。

○アンナ モナ イッカイ イッタデ エ一。あんなものは、一回行ったから、(もう)結構だ。老男→青男

次の文例では、用言のうち、形容詞を承けて、「デ」が続く。

○サバイデ カエヤセン。寒いから買うことができない。中女→中女, 赤羽根

以上、用例は3例しかあげなかったが、原因や理由を表す接続助詞の「デ」は文中の節目にあたり、特に相手の聴覚によく残りがちである。しかも「にて」という格助詞と接続助詞との融合により発生した新しい接続助詞「デ」は、渥美半島方言の特色にもなっている。

## 第四節 原因・理由の言い訳による終止指標を示して、相手に発言権を譲る叙法

日常会話では、述部の最後まで言い続けなくても、途中まで言えば察しがつく場合には、それより後を省略するのが普通である。たとえば電話の呼び鈴に応えて受話器を取り、「はい、山田と申しますが…」と言ったとする。その後続けて、「しかし～」と言うことはない。この「が」は逆説ではない。含みのある言いさしである。譲り合いのことばである。しいて「が」の後に続けるとすれば、「用件はどんなことでしょう

か」となる。しかし用件があるから電話をかけたわけだから、逆にそのように問われることは、不本意であり、出鼻をくじかれたことになり、相手に失礼である。したがって、何も言わないで、「が」の後に一瞬間を設けることが、最も控えめな礼儀ということになる。結局、「が」接続助詞は、turn-taking（「話主転換」）を促す機能を担っている。つまり、接続助詞という品詞レベルの機能でなく、会話レベルでの機能を担うものとなっているのである。

以下では、「モンデ」と「モンダイ」をとり上げ、以上の「が」と同様に、発言者の発言の「終止指標」（文末指標）として、それらが機能していることを述べる。ただし、「が」が意味上、逆接でなかったと同じく、「モンデ」「モンダイ」も逆接ではない。ともに、これらは順接である。

#### (1) 「モンデ」「モンダイ」叙法

○イチネンサクダモンデ ノン。一年作だからね。

中男→老男，豊橋市伊古部町

上の例では、「モンデ」の後に文末詞の「ノン」が来ていて、明確に発話の区切れが示されている。次の例も同じである。

○センエンツァ クレルダモンデ ノン。千円ずつは、くれるのだからね。老男→青男，豊橋市伊古部町

○ワタシラ ヨガ ナイモンデ ネー。私たちに用事が無いものだからね。老女→青男，田原

○カエンデ キタモンデ ネー。買えなくなってきたからね。中女→中男，赤羽根

以上の4文例での「モンデ」接続助詞は、そこまでも十分に発話が終止する準備が整っている。しかし、文末詞が承接することによって完璧に相手への訴えかけがなされ、文の区切りが示されたことになる。

ただし次の文例では、文末詞が来ていない。文末詞はないけれども、「モンデ」のところで文が終止することが発話者の意図に見える。つまり、言い訳を述べた後に「モンデ」で結ぶ表現形式が当該地方に習慣として存在するからである。それらは次のとおりである。

○チーサイ トコニャー クレヤヘンダモンデ。小さい所にはくれないものだから。老男→青男，赤羽根

○サキッポノ ホーオ ナリ ヨク シタヨナモンデ。先っぽの方を形良く整えたようなものだから。老男→青男，豊橋市伊古部町

○ナカナカ オーサワギダモンデ。なかなか大騒ぎだから。老男→青男，豊橋市伊古部町

○ハチジューニャ ジキ チカイダモンデ。80歳にはすぐ近いのだから。老男→青男，堀切

○イマノ ハヨリダモンデ。今の流行だから。老男→青男，堀切

○ココ ジューネンノ ウチ ソダモンダデ。ここ10年の内、そうだもんだから。老男→青男，堀切以上の6例は、前後の文脈がなければ、十分には意味が分からないようであっても、「モンデ」の後には音の休止が来ていて、文が切れることが示されている。つまり、不平や不満などの思いを述べたり、言い訳がましいことを綴って「～だものだから…」と愚痴っぽく言いよどむときには、所詮、このような形で文を終えることになるのであろう。

以上、「終止指標」として「モンデ」だけを記述した。その他に「モンダイ」もある。たとえば、

○ケンカ ケンカ。ダマッテ イクモンダイ。けんかだ、けんか。黙って出かけて行くものだから。

老男→青男，波瀬

のように「モンダイ」と「モンデ」とは意味が同じようである。しかし、「モンダイ」の方が用例が少ない。

また、文中に「モンデ」が使用され、接続助詞として機能し、前件と後件をつなぐ働きをしている。用例も少しではあるが、存在する。

○アンマリ ヤランモンデ シラン ヨ。あんまりしないから知らないよ。老男→青男，堀切

たいていは、「モンデ」が文末に位置して、「終止指標」とみなされる用例の方が多い。いわば、接続助詞の「モンデ」が、その役割を終え、終助詞または文末詞へと転成しつつあることを示しているのである。

(続く)